

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和6(2024)年
3月号
通巻643号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和6年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



春の田園風景(五條市付近)

大津美代子さん画

大倭会文化講演会報告(抄録)〈上〉

ゴリラに学んだ人間の本質について

令和5年11月12日 大倭拜殿にて

講師 山極壽一氏

報告はコンパクトにといい山極さんのご要望でしたが、どれもいい話で、どうしたらお人柄が伝わるか悩みました。結局、前半はゴリラ研究の講義のようであり、多くの著書で読んでいただくこともできるだろうと思いい、後半の人間関係に触れながら語られる部分を中心に報告することにしました。(編集部)

はじめに

司会(李章根) 山極さんは、人類学、とりわけ霊長類、ゴリラの研究の第一人者です。東京都生まれ。長じて京都大学で学ばれ、伊谷純一郎先生のもとでサル学を深められ、後にアフリカ各地を訪れ、野生のゴリラの社会生態学的研究に長年の間従事してこられました。京都大学総長、日本学術会議会長を歴任されまして、現在は京都にありますが総合地球環境学研究所の所長をされています。

山極さんと大倭を結んでくださったのが、屋久島在住の手塚賢至さん・田津子さんご夫妻です。そして大倭とも縁の深い、屋久島の詩人である山尾三省さん。山極さん、手塚さん、三省さん、屋久島の皆さん方が長年積み重ねてきた信頼関係の上に今日の機会も与えられました。

情報革命時代の、自然との出会いと気づき

講師(山極壽一) 今、私達は情報革命推進の真っ只中にいます。文字が5千年



山極壽一氏 (写真=本人提供)

前にでき、150年前に電話が、40年前にインターネットが登場しました。今はSNSの時代です。何か速度が早すぎない？って思いませんか。我々は生身を使ったコミュニケーションの中で暮らしや仲間を作ってきたにも関わらず、どんどん通信情報技術が発展してしまつた。我々はその技術を我々のために使うよりも、技術に奉仕するようになりつつある。

そもそも人間の脳というのは、意識と知能の部分が分ち難く結びついて判断力をもたらしています。意識は感情と言つてもいいし、知能は知識と言つてもいい。けれども今の科学技術は、知識・知識の部分だけ外出しにして、それを情報化し、AI(人工知能)によつて分析する技術です。意識の部分、感情の部分というのは情報にならない。だからそれを使う機会がだんだん失われ、情緒的・社会的が希薄になりつつあるんじゃないかという懸念を私は抱いています。

そこで考え直さなければならぬことは、ウイルスやバクテリア、目に見えない生命も含めて、命と命の繋がりを正確に見据えた上で、その上に新しい人間の暮らしを築かなければならない。そうしないと地球は人間の住める場所じゃなくなつてしまふし、人間社会も崩壊してしまふんじゃないか。そのために必要なのは自然との出会いと気づきだと思います。

我々は常に自然という変化する世界と出会い、気づきを与えられてきました。しかし人工的な環境は変わらないことが目的です。変わらないもの

しか我々の身の回りで評価されません。そのため我々には出会いというものを失いつつある。出会いが失われるということは、気づきも失われているということなんですね。

屋久島で何をしてきたか

私が山尾三省さんにとっても感動したことがあります。それは自然との出会いに関する話です。三省さんは2000年に著書『アニミズムという希望』を野草社(新泉社)から出版しました。2年程前に新装版が出て、私が解説を書きました。

先に、屋久島で私が何をしてきたかをお話します。屋久島の西側の海岸沿いの道路である西部林道地域には原生林がドーンと宮之浦岳の頂上まで広がっています。そこで私は1975年頃から調査を始めてきたんです。

手塚さんご夫妻が住んでおられる白川山(しろがわ)という地域があつて、そこに山尾三省さんと日吉眞夫さんというお二人の家族が1977年に住み始めて、自然に近い暮らしを始められる。三省さんはそこで詩を書かれたんですね。私はその頃からの付き合い合いです。

当時「野外博物館」という小屋を勝手に作つて、そこで色々仕事をしました。森林の中は本当に美しかったですね。その面影は今も歴然と残っています。サルがね、眩(くら)い程の日光に照らされていることがあつて、そこに会おうたびにすごく神々しい気持ちになつたことを覚えています。やっぱり野生のサルというのは美しいなと思いますね。

縄文彩が非常に評判になつて、屋久島の魅力がどんどん日本中で広がりはじめた頃でした。でも山を歩くと原生林が伐採されて裸地になつている。これはもう崖崩れ必至ですよ。こんなものを放置

しているのかと我々は怒りに燃えたものです。

一方でサルがポンカン畑やタンカン畑を荒らして、猿害が問題になっていました。それをどうしようかというので1984年に地元の若い世代と一緒に屋久島の自然や文化を勉強し、発信する「あこんぎ塾」という団体を作つた。そこで『ヤクシマザルを追つて』という冊子も作りました。

これも最近、野草社(新泉社)から絵本として再刊行されています。その後、手塚さん達が「足で歩く博物館」を作つたり、屋久島が世界遺産に登録されてからフィールドワーク講座を始めました。全国の学生を集めて夏に2週間程、地元の人にも講師になつて、自然や文化を勉強しようという会で、今は「屋久島学ソサエティ」という団体に成長しています。その時代に、日吉眞夫さんが中心になつて『生命の島』というタウン誌が発行されました。日吉さんはもう亡くなりましたが、兵頭昌明(まさあき)さんは今でも活躍されています。その第1号に私は「ヤクザルとゴリラ」という物語を書きました。同じ号に三省さんが詩を載せてるんですね。それを紹介しようと思います。

アオモジ

山尾三省

人は アオモジの木を 憶えているであろうか
北西の風が まだごとおおと吹く 二月半ば
早くも花を咲かせ 春を告げる

病み老いた父母が 小さな子供達が
そのいのちの底で どんなに久しく
その花を待っていたか

人は憶えているであろうか
アオモジーホイノキ 祝(いわ)ぎの木と 読む

人は憶えているであろうか
春三月 暖かい日ざしの中で
小さな雲となつて咲き静まる アオモジの木を

いのちの開かれる その小さな祝祭を
人は憶えているであろうか
暖かい水が その底を流れ
温かい土がその水を汲み上げ
森となり 山となる
春三月 病み老いた父母は
床をたたく立ちあがり 手に鋏を握る
子供達は その黒い瞳を空に放つ
満開のアオモジの木を
人は憶えているであろうか
わたしのいのちを お前たちにあげよう
と老いた父母がつぶやけば
そのいのちを受けましょう と子供達が微笑む
春三月 光り降る 小鳥さえず啼かぬ静かさの中で
無言の受託が行われている
アオモジ—ホイノキ 祝ぎの木と読む
人は そのアオモジの木を
憶えているであろうか

私が西武林道で調査を始めた頃、道沿いにアオモジの木がいっぱいありました。サルが食べるので、サルは糞はアオモジの匂いでいっぱいでした。だからアオモジの木をみると、あ、サルがいるなと思ったものでした。今は一本もない。だからこの詩は本当に印象的でよく覚えているんです。

屋久島から未来を創造していく思想

2001年に三省さんは亡くなりましたが、私はその時偶然、アフリカの仲間を連れて屋久島を訪れていました。エコツーリズムはどうあるべきかということ、アフリカと屋久島とで討論しようとしてシンポジウムを開いたんです。海なんか見たことがない人達を漁船に乗せてもらい、海を

見に行ったりしました。その中の一人は、絵を描いて自分の気持ちを町の人達に伝えたり、町のイベントに飛び入り参加して歌を歌った。これが凄くみんなの印象に残りました。
『アニミズムという希望』で三省さんはこんなことを書いています。

— 歌とは、神に祈ってそのことの実現を強く責め求めること。踊るといふのは歌と同じように魂の叫び。体の底から踊るといふことは、言葉で話すことと同様に人間性の深遠。美しいものはそのままカミ。カミ(神)の起源は喜びを与えてくれるもの、安心を与えてくれるもの、慰めを与えるてくれるもの、畏敬の念を起こさせるもの。そういうものは何でもカミであり、現代においてもそれはいささかも変わらない。人間というのはどんな時代にあっても、常にその時代の神話を持つ動物。神話の本質は何かと云ったら、一人一人の願いの集積に他ならない。私たち一人一人がその本質においてつくりだしていくその結果が神話になる。人類というのは陸上生物だから、土に属して土とともに生きる生物。世界というものは、ただに世界から与えられてくるものではなくて、自分の意識において意識的に世界を映し出すということができるようになる。 —

次がいよいよです。

「人がじっと木を覗けば、木が人を観る」

これは私が屋久島の森の中、アフリカのジャングルの中でいつも体験してきたことです。木は語るんです。植物や動物たちと対話をする能力を現代人は失いつつある。そういう能力を未だに持っている人がいる。私もそれを自然に覚ええました。

— 「私は誰か」ということは何もめんどうな難しいことではない。何かに感動する、何かに心を奪われて。いわゆる自我がなくなってしまうと

きに、本来の私が現れてくる。ある人がどこかへ行くという時に、そのどこかで待っているものは自分自身。自分が見た光がそこで自分を待っている。それを原郷と呼ぶ。原郷というのは、そのまま自分の根の場所。自然が持っている循環する豊かさ。循環、存在というものはただ巡るだけ。始めもなく終わりもなくただ巡りながら、今はこの姿でここにある。

あるチヨウがある植物の葉だけを食べるように、その神秘的な力を親和力と呼ぶ。あらゆる世界に親和力というものが働いている。その親和力のアンテナを鋭敏にみがいて、自然の中へ人間関係の中へ、どこまでも踏み入っていくのが、これからの新しいアニミズム。現代人はありあまる自由の中で立ち往生している。自立した個人として、生命体および非生命体をも含んだ新たな共同性をもういっぺんつくり直す——と。

三省さんは生命地域主義バイオリージョナリズムということ唱着いていらっしゃいました。流域の思想ですね。

地域という言葉はどこまでも広がるし、逆にどこまでも小さくなる。地球が一つの地域であるということが、リアリティを持つ時代がすでに来ている。

そういうものを屋久島発でやっているという感じが、手塚さん夫妻が事務局をされている「屋久島学ソサエティ」という団体です。屋久島のことを屋久島の人達だけで考えるのではなく、世界の人達と話し合いながら決めていこう。知識を共有していこう。豊かな未来を創造していこう。未来がなければ現代はない。世界への発信が重要なのである。そこに自然と繋がる大切さを学ぶということが、この団体の精神だと思っています。(次号に続く)

特集 故岸野春子さんを偲んで

去る2月9日、日聖法主の帰幽祭の祭典に向かう途中だった岸野春子さんは、大倭安宿苑の事務局近くの通路で心肺停止の状態であぐらをかいたのが発見され救急車で病院に搬送されましたが、残念な結果になってしまいました。80歳を目前にした帰幽でした。

大学生時代から大倭や「交流の家」運動に関り、大倭安宿苑で介護や事務の業務に従事、大倭印刷でも実務を経験し、ここ30年近くは月刊紙『おおよまと』のデスク（主幹）として腕を振るって編集を切り盛りしてきました。

2月11日午後6時から、大倭会館において教長矢追家麻呂さんを祭主とし、実兄の岸野林次さんを喪主として前夜祭が、翌12日午後1時からは帰幽祭が執り行われ、多くの方がたが参列されました。法名は神倭有徳波流古比女命。

今号では『おおよまと』のデスクとしても広く活躍された本人を偲んで、各方面から寄せられたメッセージや追悼文を特集として到着順に掲載させていただきます。

ちよっとだけ変わった普通人

鳥取県鳥取市 徳永 進

野の花診療所

今村忠生さんのこと、他の人にはできません。お世話になりました。個性ある人にはちよっとだけ変わった普通人でしか支えられません。矢追日聖法主の大らかさ、よく受け止め替えていただきました。ちよっとだけ変わった普通人の人でないに献身し続けることができません。

普通に身を包まれたところ、立派だったと思

ます。立春を迎えての旅立ち、鮮やかです。法主さん、今村さんにもよろしくお伝え願います。

人のために尽くす

東京都杉並区 木村 聖哉
FIWC(OB) 山脈の会

岸野春子さんの急逝の報にはびつくりしました。今年いただいた年賀状には「3月で80歳になるのですが、急にヨタヨタしはじめて、酷暑にも弱りました」とあり、「毎日の暮らしを繰り返すことを趣味にしています」と書かれていたからです。

岸野さんと私はサークル「山脈の会」でも何度か会いました。一昨年京都府・美山町でお会いした時は大倭紫陽花邑の近況など話し、その折「湯浅さんは偉い」としきりに感心していました。昨年は佐賀県唐津で集会をやったのですが、「唐津は遠い」と参加されませんでした。ただ、「80歳になってもサークルだ」というのが集会のスローガンでしたから、それにならいたい——と、まだ死ぬ気はなかったと思います。最後にこんな句が添えられていました。

「デジタルの世に馴染みかね手帳買ふ」

岸野さんの生涯は無欲で人のために尽くされた一生だったように思います。

えっ、嘘でしょ

京都市 伊東 和代
二流の会

えっ、嘘でしょ、春子さんが。えっ、嘘でしょ、そんな話。

1月の27日、二流の会の例会の日。次は3月の例会に、またね、さようなら、と言ったのは嘘じゃなかったのに。

ちよっと崩れかけている二流の会に、毎回、遠いところから来てくれたから、会がもちこたえているのは春子さんのおかげなのよ。

年に2回発行している『二流文学』、春子さんが濃厚な文章を載せてくれるから『二流文学』も続いているのですよ。

読書量も半端じゃないよ。いろんなこと知ってはるから話題が豊富で感心していたのよ。

同い年で、もうすぐ80歳ね、と言っていたのに。どうして、どうして、どうして……。

多大な功績を忘れない

京都市 「二流の会」事務局員一同
岸野春子さんの急な逝去の報に接し、二流の会会員一同深い悲しみに暮れています。

高い知性と深い教養、そして豊かな人生経験をお持ちの岸野春子さんは、毎回欠かさず、わたしたち京都のささやかな読書会にご参加いただき、いつも独自の視点から貴重な感想・意見をいただけてきました。また、会報紙の『二流文学』にも味わい深いエッセーをたびたびお寄せいただきました。

昨年の11月例会、今年の1月例会にも元気な姿を見せていただき、例会終了後の集合写真でも、にこやかな笑顔を湛えておられたのが印象に残っています。本当に貴重な方を亡くしました。

岸野春子さんは、これからもずっとわたしたちの心の中に生き続けます。そして、二流の会は、岸野春子さんの多大な功績をいつまでも忘れることなく、その歴史に刻み続けてゆくことでしょう。心より、ご冥福をお祈り申し上げます。

岸野春子さん！今後とも二流の会をお見守りくださいますよう切にお願い申し上げます。

幻の「岸野院」

滋賀県大津市

高橋 幸子

山脈の会

突然のお別れですが、「ちよつとお先に」とあつさりほほえむ春子さんの声、さりげないお姿が思い浮かびます。

最初は何十年前か、幻の「岸野院」にあります。今村忠生さんからフラッと届くふしぎな郵便！その差出人の住所によく「岸野院」とあり、私は寺院の別院にでも寄宿かと思いました。院を病院だと思った人もいます。後年、春子さんとお会いして、岸野院がどこかを知り、初対面なのに内心、ふつふつ懐かしい人だと思ったふしぎな気分。その無礼は忠生さんからだと今振りかえっています。

『はななみ通信』に「自問自答のための覚書き」をご寄稿いただき、ありがとうございます。「指輪物語」、遠州森の石松、学生時代の点訳クラブの活動からハンセン病との出会いなど、時に再読して春子さんと会いつづけたいです。この小冊子を夢野久作のお孫さん、杉山満丸さんにご紹介くださったことも感謝します。

本当は、そのうちまたお会いできると思っています。ことがぐくやしいのですが、ひとまず、さようなら。忠生さんによろしく。(元『はななみ通信』発行人)

いつも優しく

東京都東村山市

木村 哲也

国立ハンセン病資料館

この度完成した「内にある声と遠い声―鶴見俊輔ハンセン病論集」では、交流の家・大倭の関係者の方々に大変ご協力をいただきました。改めて

お礼申しあげます。

岸野さん、お目にかかることも優しく対応してくださいました。お亡くなりになったこと無念です。

岸野春子さんのこと

北海道小樽市

守谷 明宏

大倭会には1985年(昭和60年)の発足時から会員で、最初の頃は何度か大倭紫陽花邑を訪ね、誰にも声掛けせず邑内をぶらついていた。2005年(平成17年)1月、大倭印刷を訪ねた際に岸野さんと初めて知り合った。その時、岸野さんに「何か書いて欲しい」と言われた記憶がある。同じ年の11月にも再度訪ねた。当時知っている人は数人だけで、挨拶した後は邑内をぶらつき帰り際に岸野さんの所に顔を出した。別れる際に大倭印刷前の街灯の下で私の姿が見えなくなるまでずっと見送ってくれていたのが今でも目に浮かぶ。暗い道で岸野さんの姿だけがぼっかりと浮かんでいた。あの時岸野さんは何を思っていたのだろう。あれから『おおやまと』の編集を通じてずっと親しくさせていただいた。用件本文の後に読んだ本の感想や近況をメールに書いてくれるのがとても嬉しかった。返信をくれたらいいなと思うときの私のメールの最後は「ではまた」で、返信はいらないときは「ではでは」だったのを、岸野さんは今でも覚えていますか。

岸野さん長いお付き合いありがとうございます。そして、これからもよろしく願います。ではでは。

春野童女菩薩

鹿児島県久島町

手塚 賢至

岸野さんの訃報にとっさに思い浮かべたのは笑

顔、その味わい深い童女の笑みだった。

お名前のように春の岸野辺に佇み微笑みを返される菩薩のごとき御姿に胸が詰まった。

長く『おおやまと』の編集を担って掛け替えない存在であつたらう。私も寄稿の度に遅筆でお手数かけた。特に岸野さんの最後の編集となつた号は私の部分だけが空白のままに送付と逝去が入れ違ふきわどいタイミングで後継のスタッフを慌てさせて彼女のキャリアに汚点を付けたようまで心苦しかった。それでも私には菩薩様。微笑みの底に流れる地下水の清き流れと紫陽花の花のごとき奈良・大倭の地に生涯を刻まれた春野童女菩薩に心からの感謝と哀悼を捧げたい。

まぢかですらした春子さん

あじさい邑

杉本 ポン

紫陽花邑の邑人として共に暮らし始めて半世紀を優に越えてきた。

宗教は「人間性の向上や」と教えられて、共に考え、話し合った時間は数え切れない。

超自然児のショウちゃんが邑人の仲間になってからは、いつしか春子さんがショウちゃんのお世話をしようになった。「私はショウちゃんの生前供養はする。あとは知らん」が口癖となった。

とは言えショウちゃんの帰幽後も彼の祥月命日には月次祭にお供えが置かれていた。もう一人今村忠生さんと言う俗人を超越した稀有の天才を相棒にする人生だった。私にはそんな暮らしは十界に言う縁覚の修行に見えて。法主は岸野の帰るところは「九」と言われた。菩薩界だ。

豪快な人

岡山県真庭市

湯浅 芳郎

突然のご逝去に驚きました。

思い出しますと豪快な人でした。朱雀俳句会に小生と同時に会員になり有山八洲彦先生のご指導をうけました。我が家には法主様のにこやかなお顔の写真があります。最近ご逝去の溝口ツヤ子さんや中村昇次君にも会われましたか。また、文化行事には色々な所に一緒に計画したり出かけたりしましたね。

また俳句もお互いに頑張りましたね。素晴らしい句を詠まれましたね。ほんのこの間『朱雀』令和5年2月号の先頭にも次の素晴らしい句が掲載されているところです。

「秋の蚊や我が頬強く平手打」

本当にありがとうございます。最後に「冥福をお祈りいたします。」

有難うございました

あじさい色 李 草根

春子さんの昔の写真を見るにつけ、からっとしたきれいな表情だなあとと思う。帰幽されたお顔もこちらの緊張が解けるようだった。

法主様と暮らしてきた人達に学びたいと思いい立ち、邑人に受け入れて頂く中で編集に関わるきっかけを下さったのは春子さんだった。春子さんの重いジャブには時々は噛みつく新米編集部員を根気よく育てて下さった。

東京に居る頃、某仏教教団の取り組みを紹介した記事と、あなたはどうかと思うかとお手紙を頂いた。どんなものか見方をする人間か問われたのだと思う。またある時は「私にとつての大倭教は昇ちゃんです」とあったと記憶する。中村昇次さんとの関わり即修行だったのですね。人との縁を大切にされ、目立たぬ尊い働きとお人柄は、帰幽祭とお顔に現れていたように思います。

神ながら流れて

京都府八幡市 湯浅 進

NPO法人むすびの家
1965年に奈良市会議員有志の仲介によって、「交流(むすび)の家」建設反対住民との間で第1回調停委員会が開催された。そのオプザーバーとして、ハンセン病療養所の盲人会のための点字活動をしている「奈良女子大点訳クラブ」が参加した。そのなかの一人が岸野さんだった。これをきっかけにワークキャンプや大倭に足を踏み入れ、腰を下ろすことになる。交流の家のことをいつも気にかけてくれた。特に大倭の人たちとの関係では、その活動を受け入れてもらえるよう、「とおやまと」でたえず取りあげてくれた。

今年の交流の家の新年会の折「お互い今年は80歳、私が5ヶ月先輩だけど、これからのことはなるようにしかならない。神ながらに流れていこうと思う」と語っていた。

「梅咲きて天空へ発つ神ながら」

本当の編集者

熊本県水俣市 高倉 敦子

春子さんに会うと挨拶もそこそこに、いい写真送ってね、原稿書いてね、と言われて。春子さんがいたから私書いたんです。春子さんは本当の編集者だったと思います。

大きな導き手

東京都練馬区 永仮まゆり

2月11日、岸野さんのお通夜が執り行われる前に、拜殿で禊会が開かれました。私と妹は20年以上大倭にご縁がありながら、禊会初参加という次第でしたが、自然に岸野さんへの思いが溢れてき

ました。大倭に訪れた頃から今日まで、ずっと大事にしていただいたこと。『とおやまと』を通して、私たちを育ててくださったこと。岸野さんは大きな導き手でした。若き頃は福祉の仕事、その後は「とおやまと」のデスクとして、純粹に、ひたむきに法主様の教えを実践してこられた。その心を使うことが、私自身の禊になりました。いつか霊界に帰ったときに、岸野さんと一緒にお仕事させてもらえるような自分を育てていきたい。そのような大欲を持ち続けたいと思います。

寝めて貰えるのは嬉しかった。

東京都練馬区 永仮あづみ

はじめて『とおやまと』に文章を書いた時「妹にこんな才能があったとは」と言って、岸野さんがとても喜んでくれた。そこから何度か文章を書く機会を作ってくれ、その度に寝めてくれた。はっきりと物を言う岸野さんに寝めて貰えるのは嬉しかった。

通夜の日、ご遺体を拝見した。綺麗な着物を着てお化粧をもらった岸野さんは、可愛らしく美しかった。「神倭有徳波流古比女命」。波流という字が特に目に入ってきた。波流、春。「春子さん」「波流古さん」としみじみ思った。岸野さんからのメールを見返すと「生き死には寄せては返す波のごとし」と頭に浮かんだことがあります。自分で考えたのか?にしては、我ながら感心したのですが……とあった。岸野さんの死に自分の生を問う。

岸野さんの勳

あじさい色 松本 毛卜

平成10年12月、「大倭の岸野と言います」。用件を聞くと交流の家の管理人になってほしいとの

事。岸野さんの居場所を聞いて電話を切る。

1週間程して訪ねると、「ア、松本さん、ハイ」と鍵を寄こす。聞こうと思つていた事を聞かず、管理人の家へ行く。「交流の家の布団だけど、ずっと使つていいから」と運んでくれた。

翌朝、「岸野さん大変。ゴキブリが出て眠れなかった」と言うと、「エー、モトさんはゴキブリも住めない所に住んでいたの」とおっしゃる。そうか、東京は人の住む所じゃないんだ、とスゴスゴ引き下がり、東京と半々で暮らしてみようと決める。

1ヶ月の暮らしも大倭の方が長くなった頃、岸野さんは他の人にして交流の家がこの人が来たの、と聞かれると「ハイと言つてすぐに来てくれたの」と言う。私があの時どんなに葛藤したかなんて知ろうとしなかったんだと思う。

何年か経ち、「どうして私に声を掛けてくれたの」と聞くと、私とキャンパーが楽しそうにしているのを遠くから見、「この人だと思つたら顔がチラついて離れなくて。でも間違つていなかった、私の勘は正しかった」と満足そうに言った。大倭に来て26年目に入り、老いが生活に変化を与えているが、親切で思いやりにあふれる人達に囲まれて暮らせる毎日は、岸野さんの勘のおかげと感謝。ありがとう岸野さん。

む………
む………

京都府宮津市 藤本 宏秋

平成10年10月、ひよんなことから大倭紫陽花邑との縁が復活。それからの数年間、毎月のように裸会に通つた。そして、その場には皆勤賞のように岸野さんがおられて、霊界の矢追日聖法主に對して憎まれ口を叩いておられた。尊敬している

人に対して包み隠さずに吐き出すことが出来る場があることに、「なんだかいいなあ」と思つたものだ。

阿弔流為さんの慰霊に初めて行った時は、待ち合わせ場所にパートナーの今村忠生さんと口論しながら来られた。その時も「ああ、どこにいても同じだ」と、妙に安心したのを覚えている。

転職を繰り返す私を見て、いろいろと心配をおかけしましたが、これからもハラハラさせることと思ひます。今後ともどうぞよろしく願ひいたします。

ツーショット

奈良県奈良市 岸田 文子

子ども達がまだ小さかった頃、初夏の平城宮跡を散歩していた時の記憶。前方から二人連れの男女がこちらを向いて微笑みながら近づいてきた。よく見ると岸野さんと今村忠生さんだ。お二人そろつてのツーショットは初めてだったので、少々緊張しながらどれくらいの時間だったのか、子ども達を真ん中にし、穏やかで優しい時間を共にした。別れの挨拶の後、駅に向かうお二人の支え合う後ろ姿が印象的だった。

葬儀当日、棺に花を手向けた時、岸野さんのお顔が本当に美しくまるで菩薩のようでした。大倭という場で礼を尽くされ、多くのご縁をつなぎ、地下水の働きを実践された岸野春子さんに、心からの敬意と感謝を捧げます。

シャッターを切るよっぴ

あじさい邑 中島 健

「健さん、印刷で何かできる仕事ないかなあ」と声か掛つたことから始まつた。事務所の接客、校正、出版用取材文のチェック。校正仕事では顧

客に大変好評だった。来社くださる出版の顧客は事務所に入るなり岸野さんに最敬礼だった。

「岸野さん、パソコンは便利や、これからはコンピュータネットワークのデータ通信が中心になる」と聞くと、早速パソコンを購入、社内の方者と交流している間に『おおやまと』編集に関わりをもたれてテープ起こし、原稿依頼の交流となり、編集部ではなくてはならない存在となられた。

日々は自分の仕事場の周辺の草花を手入れ、昇ちゃんの元気な時はワイワイガヤガヤな彼に母親のように世話をされていた姿は胸に焼きついている。カメラのシャッターを切つたように帰幽された。霊界でも活躍されるだろうと思う。

我が道を力強く歩まれた方

広島県上島町 中本 好子

私が初めて大倭文化行事に参加した30年前前、昼食時に岸野さんの前に座つた私は何故か「うちの家は源氏です」と。即座に「うちは平家です」と笑顔で言われた。

おおやまとの繋がり妙をおぼえた始まりでした。以来メールでもたくさん取り取りしました。いつも気にかけて下さりありがとうございます。明るさを身にまとい多才ぶりを発揮され『おおやまと』紙の編集にかける集中力は抜群でした。数年前の年賀状に「霊界に還るのは子供の頃、明日の遠足を待つようでした」とあつた。髪型もその笑顔もまことに童女のようにでした。終焉の地は、2月9日、大倭紫陽花邑。これからもよろしく願ひいたします。

※故岸野春子さんに寄せられた追悼文はまだまだありますので、続きは次号に掲載させていただきます。

あじさい日記

2月9日 午後1時45分法主奥津城で法主帰幽祭のご挨拶。2時から拜殿にて法主帰幽祭。

この日は平成5年1月1日大倭神宮初参りの法話他、5日の拜殿においての紫陽花邑の事業関係者による初出式の映像を見ていただきました。

午後3時ごろ拜殿の参列者に岸野春子さんの訃報が届く。

午後11時半岸野春子さんのご遺体と兄の岸野林次さん・姪の西村友紀さんが大倭会館に入られました。

2月11日 岸野春子さんの前夜祭が午後6時から大倭会館で行われました。

2月12日 午後1時から同会館で岸野春子さんの帰幽祭が行われました。

交流の家では午前中にF・I・W Cの定例委員会。午後からキャンパーでNPO法人むすびの家族員でもあった岸野春子さんの帰幽祭に参列。

2月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後3時過ぎから紫陽花邑の教務本庁で『おやまと』の編集会議が開かれました。

2月16日 午後6時から大倭会館で甲野善紀さんの実技講習会が開かれ約23人の方が参加し熱心に取り組んでいました。

この夜は甲野さんと林修三さんが会館で一泊されました。

2月23日 雨の中で、午後1時20分から大倭神宮で申孝祭が開かれました。2時から紫陽花邑拜殿で月次祭が開かれました。

この日は昭和40年2月23日の申孝祭の法話をお聞きました。

祭典後教務本庁で『おやまと』の臨時編集会議を開きました。

2月26日 午後4時半、本紙『おやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

3月3日 午前9時から大倭墓地の大掃除が行われました。

この日も定刻は9時でしたが、私も間に合わせたつもりでしたが、掃除は終わり皆さんが集まってジュース類を手にされしていました。私もジュースをすすめられましたが、何もしないでいただいたら罰が当たります

と「遅刻してないんやから、もろたらええがな」と教長さんの言。(杉本ポン他一名)

3月4日 朝拜殿の前で挨拶をしながら、かすかな甘い香りに気付いた。邑の木々が醸し出す春のしるしだ。(ポン)

午後2時過ぎから本紙『おやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。まずは『おやまと』の2月号が無事発行出来た事を、素直に安堵し喜び合いました。そして前編集部デスク岸野春子さんに感謝。

3月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

夜6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では(菅原園)

2月18日 午後から会議室にて映画サークルを行いました。スクリーンとプロジェクターを準備して大画面で『映画ドラえもん』のび太の宝島を上映しました。映画に行く機会がなく、大画面で大きな音で迫力のある映画をご利用者は最後まで楽しめました。

2月28日 午後から各フロアでバレンタイン企画として、チョコフォンデュを作りました。バナナとイチゴと食パンに職員が温めて溶かしたチョコを絡めま

す。ご利用者はその溶かしたり絡めたりとしている様子を見ながら早く食べたいと集まり食べていただきました。毎年恒例行事として楽しみにしていただいています。嬉しそうに楽しんでいただけました。

(須加宮寮)

2月13日 書道クラブを行いました。先生のお手本を見ながら、真剣なまなざしで取り組んでいました。

2月27日 音楽療法を行いました。先生の歌やピアノの演奏を聴きながら、歌を口ずさみ、よい時間を過ごしておられました。

3月3日 ひな壇を食堂にご利用の方と一緒に飾りました。

3月5日 誕生会がありました。ひな祭りにちなみ、昼食にケーキの形をしたちらし寿司を美味しくいただきました。

2月7日~29日(特養)感染症対策のため予定を変更して節分の飾りつけと音楽を流すことによって季節を感じてもらいました。

2月22・28日(デイ)作品づくりで皆様と一緒にひな様とお内裏様のでんでん太鼓を作りました。

2月14日 本日はバレンタインデーという事でおやつ時に焼き菓子(チョコ)が用意され、女性職員から男性ご入居者へ手渡しして、最後に記念撮影を行いました。

(茂毛路園)

本紙今月号の巻頭を飾っている山極壽一さんの文化講演会が行われた昨年11月12日の翌日、偶然林りえさん、佐藤円さん主催の「大倭リトリート」という会が予定され開かれた。そしてその催しのゲストとして招かれていた武術家の甲野善紀さんが予定を1日早めに山極さんの講演会後に開かれていた懇親会に合流され、昨今話題のビックな

お二人の初対面の間が現出した。異分野のお二人ではあるが、そこは達人二人、互いに垣根を越えて豊かな歓談の場となった。いずれ両者の対談本が出版されるかも。

その時の様子は次号の写真で紹介する予定。(H)

あんない

*月次祭(大倭神宮) 4月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*須佐緒祭(大倭大本宮) 4月8日(月) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。恒例の園遊会はなくなくなりました。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の頭面面における一体のもとたる須佐(結び)の緒に感謝をするお祭りです。

*大倭会主催祝会 4月14日(日) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

*箭負祭(大倭神宮) 4月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮ります登美の神奈備(大倭神宮)の霊威を法主日聖大恩師の遠祖(箭負氏)が代々祭祀し、神仕えてきたことを記念するお祭りです。

*月次祭(大倭大本宮) 4月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

講演会エピソード

本紙今月号の巻頭を飾っている山極壽一さんの文化講演会が行われた昨年11月12日の翌日、偶然林りえさん、佐藤円さん主催の「大倭リトリート」という会が予定され開かれた。そしてその催しのゲストとして招かれていた武術家の甲野善紀さんが予定を1日早めに山極さんの講演会後に開かれていた懇親会に合流され、昨今話題のビックな

お二人の初対面の間が現出した。異分野のお二人ではあるが、そこは達人二人、互いに垣根を越えて豊かな歓談の場となった。いずれ両者の対談本が出版されるかも。

その時の様子は次号の写真で紹介する予定。(H)